

25 年間に及ぶ高等学校での方言教育の軌跡

発表者 札埜和男¹

1 はじめに

31年間（中学校2年・高等学校29年）の教育歴のうち、最初の3年間は社会科教員、後の28年間は国語科教員として勤めてきた。国語科教員となってからは4年目（教員7年目）より継続して方言教育を学年問わず実践してきた。事情によってまとまって扱えない年度もあったが、何らかの形で「方言」には授業で触れてきた。25年に及ぶ自身の方言教育の変遷をそのときどきの目論見、実践内容、教材に言及しながら紹介したい。

実践内容としては、教科書掲載の作品を教室で読み合ったり、VTR (DVD) を視聴しながら考えたり、レポート提出であったり、班別学習であったり、作品集の作成であったり、その時々での現場での目当てや生徒の様相によってさまざまである。動作を伴って方言を考える実践もあれば、ゲストを招いて方言にまつわる話を聴きながら考える実践も行った。方言辞典を作成する実践は、赴任した3校全てにおいて行うことができた。

2 京都府立東稜高等学校時代（8年間：1989年度～1996年度）

方言教育の始まりは全くの偶然からであった。大阪市役所の前を通った時に、大阪弁のポスターが貼ってあり、それを見た瞬間にこれは使える、と判断したのである。大阪市が1992年6月から1993年3月にかけてイメージアップの一環として作成した媒体であり、梅棹忠夫や田辺聖子、桂米朝といった大阪ゆかりの文化人が大阪弁を1つ採り上げまつわる話を書いているポスターであった。早速「国語表現」でそれを教材として授業化したところ、マスコミにも記事として紹介され、授業の様子がテレビでも放映されたのである。このことを契機に本腰を入れて方言に取り組むようになった。「Think globally, Act locally」ということばがあるが、初期の方言教育の意図は関西方言を通じて世界に思いを馳せ授業で学んだ考え方や見方をもとに行動していける、そのような力を養うことであった。俵万智の短歌「この味がいいねと君が言ったから7月6日はサラダ記念日」という短歌及び当時ヒットしているラブソングの関西弁翻訳、NHK大阪放送局制作の『ぼちぼち出番や！大阪弁』（1992年11月28日放送）という番組内での（有働由美子の司会による）大阪弁を使用したニュースや交通情報の関西弁効果についての考察、朝日放送『探偵ナイトスクープ』による「アホ・バカ分布調査」の経緯をまとめた『全国アホバカ分布考』（松本修1993 太田出版）を教材化しての古語と方言の関係についての講義、桂三枝（現在の桂文枝）の創作落語『大阪レジスタンスー大阪弁が死んだ日』を劇化したVTRの視聴を通じての感想文提出、といった実践を行った。

この実践をある全国的な研究会で発表したところ、東北の日本史教員から次のような指摘を受けた。「あなたの実践は関東と関西を比較して全て語り尽くしたような授業になっている。我々東北の日本史を教える教員は教科書に掲載されている『蝦夷征伐』の4文字を東北の視点から読み変え、中央集権的な歴史観を打破することから始まる」という指摘であった。このことばはそれ以降、方言教育を行う際に忘れてはならない視点となった。

これら一連の授業経験をもとに、1995年度には自分たちの身近な存在である方言を出発点に、異質

¹ ふだの かずお（岡山理科大学教育学部 shiika-taka@nifty.com）

な「もの」との出会いを通じて、複眼的な思考力・批判力・社会との関わり感の獲得を目指す方言授業を試みた。この時に京ことばの背景にあるもてなしの文化を理解させるために、座蒲団とうどんの鉢を使った授業を行った。座蒲団を用意しておいて生徒が出し方を実演する、鉢と割り箸を使ってうどんを食べ終わった後の所作をする、誰かの家を訪問して角を曲がって帰っていく時の動作をするという授業である。すると、ほとんどの生徒ができずに「京都人失格だ」という感想が現れた。京ことばにこめられている相手を気遣う心が、京都のしきたりに息づくことを理解させる意図であったが、他者からの指摘により、この授業の本質はことばと身体が引き裂かれていることへの問題を孕んでいる所にあったことに気づいた。この年度では意図して2人のゲストを教室に招いた。一人は福島県出身の同僚の理科教員であり、もう一人はドイツ人の大学教員である。東北から見た関西弁、ドイツから見た関西弁の授業は生徒に関西弁を相対化する視点をもたらした。この取り組みは翌年（1996年度）の実践に生かされることになる。

1996年度では「関西弁辞典」を作成する実践を行ったのだが、単に作成して終わりではなく、それを全国さまざまな高校に送ってアンケートに答えてもらうことを行った。結果的には全国19校に送付した。アンケート先からの回答として、筆者も生徒も驚いたことの1つが「友達と話す時にはよく真似て関西弁を話す」（秋田の高校生）という「方言コスプレ」（田中ゆかり）の現象が起きていることであった。生徒たちは当初、東日本の高校生の反応は冷たいという予想をしていたのだが、関西弁だと思っていた『イケてる』が関東の高校生に普通に使われているといった回答などを見て、関西弁への肯定的な評価や受容のされ方に、予想を覆されたのであった。一方でことばの均質化に寂しさや問題意識を持ったといえる。

言語社会的に考えさせる意識は持ちつつも、この時期の方言教育の主な意図は自文化理解、自己のアイデンティティの確認、異文化理解であったといえる

3 京都府立八幡高等学校（現・京都八幡高等学校）時代（10年間：1997年度～2006年度）

新たな転勤先でも関西弁辞典を作成させたり、生徒の実情に合わせた方言教育を行ったのだが、この時代は、権力の視座から方言を捉え、社会を考える授業を本格的に行った時期である。そのような質的転換を図る経緯は、前述の京都風の所作とことばにまつわる実践に関する他者からの指摘である。教育学研究者の竹内常一（國學院大学名誉教授）は筆者の実践を評して『高校生活指導』132号に次のようなコメントを寄せた。

「（私たちは）まったく京都人失格だ。使えたら使いたい。（中略）そうだとすれば、『なぜ私たちが京都人失格となっているか』という問いが立てられてよかったのではないか。そういう問いが立てられていたならば、身体性を持たない書きことばを基本にしてつくられた標準語（国家語）の強制が、地域社会のことばがもっていた豊かな身体性を剥奪し、日本人の表情豊かな身体性を硬直した国家主義的な身体性へと画一化してきたこと、その歴史がいまなお続いていることが生徒たちに意識化されたのではないか（後略）」（高校生活指導研究協議会編1997 青木書店：p.10）。

教材としては新たに嘉門達夫『関西キッズ』、なにわことばのつどい作成の「なにわいろはがるた」、真田信治『方言は絶滅するのか』（PHP新書2001）などを加えるとともに、その指摘を明確に意識して取り組んだのがこの時期の方言教育実践であった。したがって『大阪レジスタンス』を同じように鑑賞させても「大阪弁教育など言語統一と何ら変わらない、大阪を真ん中に置いただけ、好きなことばを使えるようにするための運動は最後は自文化のみを残そうとする運動に変わっている、結局大阪が良けれ

ばそれでいいのか、標準語の良さを見直すことは全くやっていない、自文化絶対主義の行く先を痛烈に批判している」といったような、前任校以上に批判的な意見が多く出されるようになった。

また『アホ・バカ分布考』を教材として利用しても、古語が全て京都のことばに集約されて解釈されることを問題として投げかけるように変えた。北九州出身の教員と方言について対談する授業を行った際、ある生徒は、方言がテーマであるにも関わらず北九州のことばで語らない教員の姿に疑問を呈し、日本にはことばの学歴社会が存在するのではないかと指摘した。また「ことばに境目はないほうが良い」という教員の発言に対しては「境目をつくらず1つの目で見るとは地域独自のものが1つに固定されて想像力の欠如につながる、国籍があってもそれをもとせざ一方でアイデンティティを大事にする気持ちが必要なのではないか」といった意見も寄せられた。

この時期においては、前任校よりも言語社会的に方言を扱えるようになったといえる。換言すれば「国語と方言」の関係を問い、「権力」の視座から方言を生徒に考えさせるという意図を明確に持つようになったのである。

4 国立大学法人京都教育大学附属高等学校時代（10年間：2007年度～2016年度）

3校目となる勤務先では、方言教育の目論見は変わらずとも、進学校という性格や、実質的に「国語表現」といった選択科目がないカリキュラム編成、「現代文」が2単位という教科事情があつて、これまでの2校とは異なる授業方法の創意工夫が必要となった。「方言」をそのままテーマとして扱うことはできにくくなったので、教科書に掲載されている、ことばをテーマにした教材に関連させて方言を扱うようにした。例えば橋本治『敬語への自覚 他者への自覚』、中野重治『梨の花』、雑賀恵子『舌の戦き』などである。また「言語景観」を教材として採り入れた。例えば、街で見かけた方言景観の画像はもとより、筆者の研究テーマである「法廷の方言」研究として収集した裁判員制度啓発の際に作られた地元方言を使用した幟や看板・ポスター・チラシ、「枚方パークの岡田准一の『おま』ポスター」などである。修学旅行の行き先が北海道でありアイヌの事前学習も兼ねて、アイヌ語を始めとする危機言語も扱うようになった。自由課題として北海道の方言（言語）景観を携帯写真に撮って提出させる課題も出すようになった。視聴覚教材としては前田達朗（東京外国語大学）制作『瀬戸内のシマグチ』、斎藤孝制作『CDブック 声に出して読みたい方言―「方言の湯」に浸かろう』（2004 草思社）のCDなどを使用した。

この時期は、方言から派生して言語景観や危機言語だけでなく、地域方言と社会方言、近代国家と方言、敬語と方言、標準語と方言撲滅運動、若者語、方言の復権、言語と経済といった話題にも触れながら、方言を含めたことばの正しさについて意識して生徒らに問うようになった。定期試験の問題に、「正解」のない、方言を始めとすることばの問いを積極的につくるようにもなった。その背景には生徒の中に蔓延る「正解主義」と「正しいとされることへの鵜呑み」がある。18歳選挙権が認められ主権者教育の重要性が高まった現代社会においては、所与のものを疑い、批判的思考力を養って社会を創っていく力を培うことを目的とするシティズンシップ教育としての側面が、方言教育にも求められるようになったといえる。

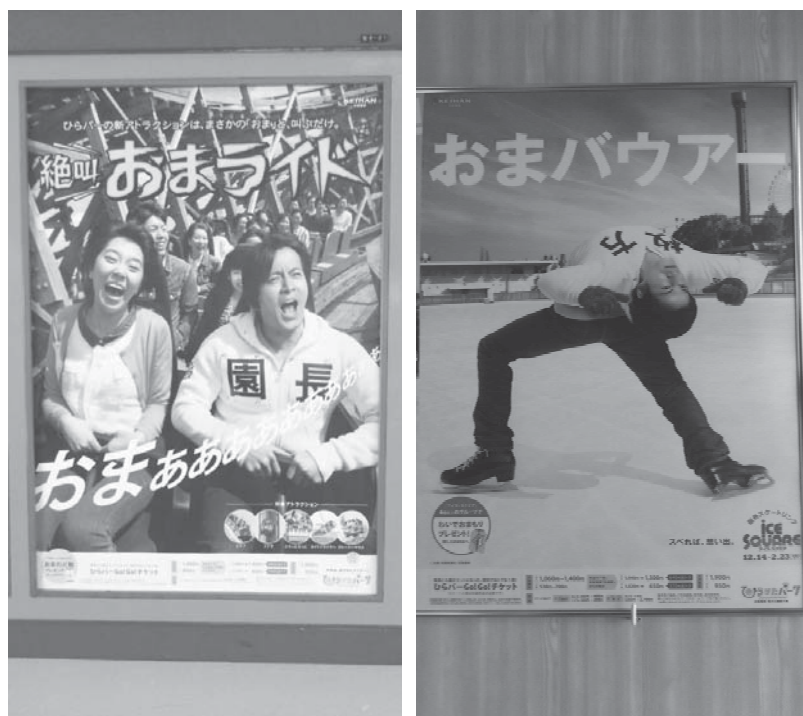
5 おわりに、そして、これから（2017年度～）

方言教育の実践にあたって重要なことは、その学校の国語科教員が日常の授業で、息長く折に触れて方言を話題にしたり、年間の授業の中であらかじめ単元学習として扱う計画を立てることである。日常

的に意識しないことを意識として根付かせるためには、イベント的に方言を扱うよりも、日常的に一般の授業で扱うことが大切であろう。今後はこれまでの実践をもとに、主に3つの点について研究していきたい。1つは日常の国語科教育の中で方言教育をどのように扱うか、そのメソッドを確立することである。2つめは「国語」科の中で行う「方言」との関係性を権力の視座から、国語科教員の意識と合わせて研究していきたい。今まで「関西」というある意味、権力性を持つ地域から方言教育を実践してきたが、このたび「岡山」という関西でも関東でもない土地に赴任することになった。「岡山」を中心に据えてどのような方言教育を展開できるのか研究することが3つめのテーマである。

(参考文献)

- 札埜和男 (1997) 「ENJOY KOKUHYO」 全国高校生活指導研究協議会編『高校生活指導』132, 22-27.
- (2005b) 「ことば・教育・文化・社会」 竹内常一編著『授業づくりで変える高校の教室 2 国語』43-103, 東京：明石書店.
- (2005c) 「国語教育と方言」 真田信治・庄司博史編『事典 日本の多言語社会』306-309, 東京：岩波書店.
- (2016a) 「関西における方言教育の実践紹介及びその特徴について」『京都教育大学紀要』128, 119-129.
- (2016 b) 「方言教育をめぐる国語科教員の意識調査とその結果」『京都教育大学国文学会誌』44, 11-24.
- (2016c) 「シティズンシップ教育としての方言教育—方言教育は誰のためか—」 日本方言研究会編『方言の研究 2』193-216, 東京：ひつじ書房.



教材例：枚方パークの岡田准一『おま』ポスター